勿凝学問 168

やはりメディアは政策提言なんかやめておいた方が世のため人のためだろう
一連の新聞各社による年金改革提言を傍観しながら思うこと

2011 年 3 月 7 日　追記
2008 年 7 月 8 日

慶應義塾大学　商学部
教授　権丈善一

先日、映画「クライマーズ・ハイ」を観た。1985 年 8 月 12 日の日航機墜落事件をめぐる新聞記者たちのドラマである。パンフレットに新聞業界の用語解説が載っていて、その中に、「スクープ＝抜く」と書いてある。英和辞典をひいてみると、scoop は（穀物・銅貨・砂糖・石炭などをすくうための水平の柄のついたひしゃく状の）すくいシャベル、小スコップのことで、転じて、ジャーナリズム用語として、特ダネで他者を抜くこと、口語としては大もうけ、大当たりの意味とある。「明日にはみんなが分かることを、今日報道して何がうれしいんだ」などということを新聞記者さん達に訊いては、その返事を愉しんでいる僕としては、「クライマーズ・ハイ」を観ることによって、彼らがどのような環境で日々職業人としての訓練を積んでいて、なにをもって「良いこと」と考えていたり、なにをもって「あいつはできる奴」と見ていたり、そうした基準が当然のことながら社内の昇進基準にも反映している状況を知るのに、とても勉強になった――といっても、僕の知っている記者さん達は、まじめに社会保障を勉強しようとしている人たちが多いから、新聞記者の一般的な行動原理を、ちょいと醒めた目でみている人たちであったりするのだが・・・。

ところで、10 年ほど前にはやったテレビドラマ、「踊る大捜査線」に、捜査本部が置かれた部屋の前に掲げる立て看板に何事件と書けばインパクトがあるのかを、担当の警察官が真面目に悩み、まわりに「ねぇねぇ、この○○△△殺人事件っての良いと思わない？僕センス良いでしょう？」と相談するシーンがある（記憶は曖昧だが、まぁこんな感じ）。このシーンの話は、今年 1 月 7 日に日経新聞が年金改革案を出した頃から、メディアが政策提言をするということの意味を、学生に説明する際にしばしば登場する話である。

報道機関が政策提言をしたら、その後の報道の中立性が損なわれる――などという高尚なことを言うつもりはない。もっとそれ以前の問題がある。メディアが政策提言を行おうとする際、彼らは提言の「目玉」を求め、他との差別化を求めて相手が白と言ったら黒と言う、世の中に最もインパクトのあるポジショニングを求める、というようなことを考えているとしか思えない。メディアが政策提言を考える際には、理屈は後から付けられるデ

ィベートを愉しむ傾きが強く現れることになる。こうしたメディアの政策提言動機とあるべき政策が一致する保証はあまりなく、その一致が万が一いや億が一起こったとしても、それは単なる偶然の結果にすぎないとしか言いようがない。

日経がこう攻めて来た。読売はこう出るだろうから、朝日はこう構える。日経と朝日がそう布陣したなら、読売はこう攻めるしかあるまい。そしてこの３紙に遅れをとった毎日新聞は、ただひたすら、日経、朝日、読売が触れなかった側面をついて、なんとかして派手な見出しをバーンと掲げることができないかと思案する――良いものは良いものとして、別に他社と同じでも構わないではないか、その点に関しては別に今のままでも良いではないかなどという発想は、就職後何年間もそういう発想とは対極の世界で訓練を積んできた彼らメディア人には絶対にあり得ない。

彼らが勉強をして様々な論者を評価する能力を身につける、たとえば民主党案を「詳細は不明、評価は困難」と評した読売新聞のような能力を身につけるのは望ましいことではある。しかしそうした批判はなにも自らが政策提言しなくてもできることである。やはりどう考えてみても、メディアは政策提言なんかはやめておいた方が世のため人のためだろうと思う[1]。

最後に――これもしばしば講義で話すことであるが、残念ながら、研究者にも、メディアと同じように、ポジショニングを意識した行動をとっているとしか思えない者が少なからずいるように見受けられるのである。普通にディベートというゲームが成立するように、世の中の出来事はいずれの立場からも論じることはできる。じっくりと議論を行えば勝敗が決まる場合でも、じっくりとした議論を逃げ続けておけばどんな立論でも生き延びることはできる。物事のこうした側面が社会に与える混乱を避けるために、研究者の間には、カエサルが洞察した「人間は、自分がみたいという現実しかみない」という人間性の落とし穴に陥いらせないためのお作法がいろいろと準備されている。だが、日本の社会保障研究のような甘い世界では、このお作法を守らずとも軽く生きていくことができる。社会保障研究面でのこのだらしなさが、お騒がせ研究者にこの世界での跋扈を許し、年金をはじ

---

[1] もっとも、一連の新聞各社による年金改革提言をプラスに評価している人たちもいる。例えば、「年金「試案」大論争」『文藝春秋』2008 年 7 月号がある。
ちなみに、上記の文章中、「今回が異例なのは、これらの提言が政府に持ち込まれ、官僚、政治家を巻き込んだ論戦に発展したことだ。３紙は１月から４月にかけて相次ぎ年金改革案を発表、これを受けた政府の社会保障国民会議の分科会は５月 19 日、基礎年金を消費税で賄う税方式に移行した場合などの資産を示した」とあるけど、国民会議での試算は、３紙の年金改革案を受けて行ったわけでもなく、ああいう試算は以前からやりたかったから僕が提案してやってもらっただけ。３紙が年金改革案を提案していなくても、やっていた試算です。それと、３紙の論説委員を社会保障国民会議の分科会に呼びましょうと言ったのも僕です。案の定、盛り上がったでしょう（笑）。

めとしたこの国の社会保障が政局作りに簡単に利用されてしまう一因になっているようにも思える。

追記

　この文章を書いて、2 年半以上経ち、動きがある。当時、口にするのも腹立たしかったことも、月日が経って書くことができるようになっている・・・。

　以下、HP への書き込み。

2011 年 2 月 4 日
政治が茶番劇を演じれば、庶民も一緒に踊らなそんそんってか。 > ２月８日夜に東京財団で、日経・大林、読売・小畑、朝日・梶本が集結し、年金の新聞社案をめぐり討論会をやるそうです。 でっ、なんで毎日を呼んであげないんだ。 あれだけアホなことやったのに、かわいそうだろう。 参考までに――4 番手として、毎日新聞が、年金改革案を出した時に書いた文章。 • 勿凝学問 168　やはりメディアは政策提言なんかやめておいた方が世のため人のためだろう――　一連の新聞各紙による年金改革提言を傍観しながら思うこと 　まぁ、今は昔の話だけど、あの時は、1 回目は研究室で２時間ほど、2 回目はプレスセンターで 1 時間半ほどの説明をし終えたら、「先生の話はよくわかりました。それに、朝日も良いポジションを取ってるんですよねぇ。でも、１面にドーンと毎日案って出せるのがほしいんです。何かないですか？」と、シラっと言った長老の記者の言葉を機に、僕は毎日新聞の購読を止めた。ちなみに、その記者は今はおらず、最近では、こういう良い年金記事がでてきてもいる（以前紹介したけど、リンク期間が終了しているね）。 • 記者の目：手つかずの民主党年金 2011 年 3 月 7 日改革案＝吉田啓志（政治部）　『毎日新聞』

2 月 24 日
今は退職した論説委員がひとりいなければ、当時の毎日新聞の年金改革案は、今日の社説のようなものになっていたんだろうけどな。2 月 4 日にも書いているような事情ゆえに、いったん振り上げてしまった拳を下ろすのにちょっと苦しそうだけど、まぁ、そこのとこ

ろは愛嬌ということで微笑ましくで受け止めておきましょうかね（笑）。

- 年金改革　まず一歩を踏み出そう　毎日新聞

民主党も、「まず一歩」そして「条件がそろった何十年後かに、これまで言ってきた抜本改革を」という２段構えにして、振り上げた拳を下ろすしかないんだから、まぁ、バカなことを言ってきた人たちがとる常套手段というところだね。まぁ、そういう方向への転換は、世のため人のために大なるゆえ、歓迎します。

今週の土曜日の社会保障集中なんとかかんとかというところに、毎日新聞も呼んでもらえるようになったのかな。あっ、産経新聞も、せっかく頑張って年金改革案を出したのに呼んでもらえないんじゃかわいそうだよね。事務局はちゃんと気を配ってあげているだろうかね。

でっ、朝日と毎日は、誰が報告に行くんだ？　当時の責任者は、すでに退職しているんだけどねぇ。元気なのは、日経新聞くらいじゃないのかぃ。あぁ、悪い悪い、退職されても元気だった。明日、飲みにいくしな。。。

おまけ

> 毎日新聞、露骨に路線修正してきましたね。
> ブレーンである先生の宗旨変えの影響でしょうか？
> フィンランド方式のまま、突っ張ってくれた方が面白かったのに。

ちなみに、彼らが言う条件が全部そろった場合であっても、僕は、彼らが言う年金改革案が理想だとは思っていないという話は、次にある。

- 勿凝学問 331　もし、所得捕捉の問題なかりせば――社会保障の制度設計における夢と現（うつつ）の分岐点

あっ、それと、今朝の日経の大機小機「年金改革の第一歩」は、年金、というよりも、社会保障を、そして政治をかなり分かっているみたいだね。執筆者の名は、与次郎――与太郎と似てるんだけど、人格がかなり違うみたいだ（笑）。

3 月 1 日
２７日日曜日の朝日新聞に、彼らが先日土曜日の社会保障なんとか会に欠席した理由が

載っていたな。「新聞の中立性を守り、政策などに対する主張は紙面で行うのが原則」とかなんとかいう文面。となると、数年前、なぜ、社会保障国民会議に朝日新聞は出席したのか？ということになる。

先週の金曜日に僕が居酒屋で取材した情報によると、「あの時は、権丈さんがわたしに電話してきたから」とな。。。なるほど、そりゃそうだ――ゼミの休憩時間に南館の４階から電話したことを覚えてる。

まぁ、今回の朝日欠席の一報を聞いた時、僕はなんと言ったかというと――「消費税の引き上げをみなさん共通して主張されていると与謝野さんがまとめ、みなさん十分に共通したお考えのようでと菅さんが締めるシナリオが決まっている茶番劇につきあうことはないさ。今回の朝日はご立派」。

今回の会の意義をなんとかして見出すとすれば、まぁ、これまでかなりまともな年金報道をしていた産経新聞にも参加を促して民主党の方向転換に荷担させ、連合と毎日新聞に２段階改革方式に切り替えさせるきっかけを与えたということだろうな。それにしても、詐欺選挙ってのは、その後、莫大にムダな行政コストを発生させるもんだとしみじみ思うよ。これがいくら大きくても行政コストに留まればいいんだが、危ないな。